NMO-IgG の対応抗原が AQ4 抗体であることが明らかとなってきている。本症例は視神経病変を認めないが、頚髄の長大な脊髄病変を呈し、抗 AQ4 抗体陽性であった。MNO の診断基準は満たさないが、抗 AQ4 抗体が脊髄炎の発症に関与していると考えられた。治療はステロイドパルス療法、プレドニン漸減内服投与を行い、有痛性強直性痙攣はほぼ消失し、MRI 所見も改善した。MRI にて髄内病変を認める疾患としては、脊髄損傷、原発性脊髄髄内腫瘍、転移性脊髄腫瘍、シェーグレン症候群、サルコイドーシス、梅毒、結核、ウイルス性脊髄炎、HAM、寄生虫性脊髄炎、自己免疫性疾患、抗リン脂質抗体症候群、血管内悪性リンパ腫、髄内出血などが挙げられる。本症例は MRI 画像上は上記疾患との鑑別は困難であったが抗 AQ4 抗体測定により早期ににて診断し適切な治療を行うことができた。脊髄疾患の鑑別において抗 AQ4 抗体測定は有用と考えられた。

P1-25.

初期臨床研修医を対象とした形成的評価の試み
—基本的診療手技の OSCE とシナリオシミュレーションによる評価—

（東京医科大学病院卒後臨床研修センター）
○阿部　幸恵、山科　　章、大滝　純司
平山　陽示、永井　秀三

【緒言】 新臨床研修制度では、一般的な診療での初期治療に対応できる基本的診療能力の習得を理念とし、研修期間に習得すべき項目を示している。本院では、平成 20 年度より、採用時点に基本的診療手技の学習をシミュレーションによる体験型学習にて行い、その後、採用 3 ヵ月時に形成的評価を行っている。今回、研修 1 年目終了時に、基本的診療手技の習熟度を OSCE で、また、医療チームとの連携の意識化と評価のために症例シナリオによるシミュレーションを行い、研修 1 年間の到達度と課題を検討したので報告する。【方法】 対象：平成 20 年度採用の初期臨床研修医 36 名。調査日：平成 21 年 3 月。調査方法：習得必修項目から選出した 4 手技の OSCE および内科・外科症例シナリオに看護師と研修医から構成したチームで対応するシミュレーションを行い評価した。評価は、安全･正確な技術、チーム連携を視点とした評価表に基づいて自己・他者双方から行った。評価は 4 段階評定とし、分析は基本的統計量と Mann-Whitney 検定を行った。【結果と考察】 手技の OSCE は、多くの項目で自己・他者評価ともに高得点を示し、採用時点からの手技の向上が示された。70% 以上の研修医が未経験の「気管挿管」や「除細動」についても高い得点を示したことは、BLS や ICLS を必修とした効果と考える。さらに、自己評価・他者評価間で有意差を示した項目は、医療チームの一員としての動きや安全に対する配慮などで、いずれも自己評価が低かった。知識が行動につながらないという課題を自ら強く意識したと考える。【結語】 1 年次終了時点の OSCE は自己評価能力の向上に繋がると同時に臨床技能習得における各自の課題を明確にした。また、症例シナリオに基づくシミュレーション体験も医療チームの一員であることの再認識とチーム医療における各自の問題点を明確にし、その後の研修の向上に役立つと考えられた。

P1-26.

学生勉強会 DOCS による屋根瓦教育

（医学部六年）
○上杉　泰隆
（医学部五年）
中野　宏己
（東京医科大学病院卒後臨床研修センター）
阿部　幸恵、山科　　章、大滝　純司
（臨床検査医学）
福武　勝幸

【緒言】 東医祭内科模擬健診の態度・知識・技術での更なる向上を目指し、本学 4 年次学生有志は 2 年前より屋根瓦方式による事前準備を行ってきた。本学学生勉強会 DOCS は、事前準備をより充実したものにする為に、学生有志に協力してきた。その際の経験と、内科模擬健診当日に受診者および本学学生双方に行ったアンケート結果を報告する。【方法】 対象は、平成 19 年度及び 20 年度本学 4 年次学生、平成 19 年度及び 20 年度東医祭内科模擬健診受診者とした。双方に対し、選択式と自由記載式のアンケートを実施した。受診者が自由記載欄に記載した内容について、主に内科模擬健診に於ける学生の態度面

についての問題点をKJ法を用いて抽出した。【結果】意見は、「態度」「口調」「言葉遣い」「身だしなみ」の4つのカテゴリと、8つのサブカテゴリに抽出された。問題点としては、「声が小さい」「異性へのプライバシーを考慮して欲しい」「緊張が伝わってくる」などの意見が多く抽出された。良かった点としては、「優しい雰囲気」「優しい口調」など「優しい」という表現が目立った。【考察】 今回のアンケートの自由記載欄に書かれた内容は、学生の態度・身だしなみに関するものが殆どであり、この事からも一般市民の医師・医学生に対する態度・身だしなみに対して強い関心を寄せていることがわかった。平成19年度及び20年度の東医祭内科模擬健診では、態度領域だけに特化した事前準備は行わなかった為、各自の態度・身だしなみに差が生じてしまったと考えられる。今回の結果は「知っている」と「できる」の違いを強く私達に感じさせられる結果であり、今後本学のカリキュラムの中にも積極的にコミュニケーションやプロフェッショナリズムの教育を行う時間を確保することが望まれる。【結語】 一般市民が求める医師像に応えていく為にも、カリキュラムの中に態度領域の教育を行う時間を確保する必要がある。

P1-27.

医学部学生による医学部1年生へのCPR+AEDプロバイダーコース

（医学部六年）
○上杉　泰隆
（東京医科大学病院ライフサポートコース運営委員会）
川原千香子、太田　祥一、山科　　章

【背景・目的】 近年、一般市民によるAED使用例は増加傾向にあり、心原性心停止例でAED使用例の生存率は42.5%と高く、医学部学生なら使用できることが期待される。入学直後のモチベーションの高いと思われる時期に、医学生による心肺蘇生法講習を行ない、その効果を検証した。
【対象・方法】 医学部、看護学校学生有志で任意の心肺蘇生法普及団体を設立し、そのメンバーが東京医科大学病院のCPR+AEDプロバイダーコース、インストラクターコースを受講した後、同プロバイダーコースに準拠して講習を行なった。講習の管理は同院ライフサポートコース運営に携わる医師、看護師が行なった。医学部1年生106名中を対象に行ない、7月までに受講した101名（95.3%）の試験と質問紙調査結果を分析した。
【結果】 試験結果は筆記（100点満点）平均90.9±7.26点、実技（40点満点）平均36±3.26点で、筆記3人、実技2人が合格基準（80%）を満たさず再試験となったが、その後全員合格した。93%がAEDを知っていたが、受講経験は41%にとどまった。96%が意義あると考え、93%が普及は重要だと考えていた。受講後に自信を持って必ずできる、やろうと思えばできると答えたのは、応援要請100%、反応確認98%、胸骨圧迫97.9%、AED使用96.9%の順で多かった。また、先輩学生による指導は親しみやすく、医学生としての自覚や学習意欲が向上したとの意見が多く聞かれた。
【考察】 入学前の受講経験は少なく早い時期に講習を行なう有用性が示唆された。蘇生のエッセンスを自信を持ってできるようになったと自覚できた他、多くが普及の必要性を理解でき、さらに、医学生としての自覚や学習意欲が向上したという副次効果もあり、本講習は意義があり、継続の必要性が示唆された。

P2-28.

自転車運動負荷試験中における大腿筋群脱酸素化の不均一性

（大学院三年・健康増進スポーツ医学）
○大澤　拓也
（健康増進スポーツ医学）
木目良太郎、藤岡　正子、高木　　俊
安生　幹子、佐藤　綾佳、下村　浩祐
長田　卓也、村瀬　訓生、勝村　俊仁

【目的】 本研究では自転車運動負荷試験中における大腿筋群脱酸素化の不均一性について、解剖学的、組織学的に異なる様々な大腿筋の酸素飽和度の変化より検討した。【方法】 健康な成人男性12名（24±3歳）を対象に、ランプ負荷法による自転車運動負荷試験を疲労困憊に至るまで実施した。試験中、ブレスバイブレス法により呼気ガス解析を行い、換気性作業閾値（VT）、最高酸素摂取量（$\dot{V}O_{2peak}$）を算出した。近赤外空間分解分光法を用いて、外側広